埼玉工大紀要
No. 2 (1984)

E. M. フォースターと「近代」の問題

上

序説　「近代」をどう考へるか

Ⅰ　「長い旅路」

下

Ⅱ　「ハワーズ・エンド」

Ⅲ　「インドへの道」

E. M. フォースターと「近代」の問題
下

広　瀬　友　久

Ⅱ　「ハワーズ・エンド」

1910年に出版された「ハワーズ・エンド」は，ほぼ10年に渡るフォースターの創作活動を締めくくる作品であり，そこで，それまでの3編の長編と，数多くの短編によって追求されてきた問題が，エドワード期のイギリス社会を見通す立場から集成される形になってゐるといってよいであらう。以後彼は，同時代のイギリスを扱った小説を発表しなくなる。彼は後に，自分が小説を書かなくなった理由として，世の中の変化についてゆけなくなったことを言ってゐるが，それはこの「ハワーズ・エンド」に於て，問題に納得のゆく答が出せなかったといふことと大いに関係ありさうである。

「長い旅路」の中では，主人公リッキーは，ケムブリッジで得たあるべき生の原型的イメージを，同時代の現実に反映させる生き方ができなかった。それ故，自分の生きてゐる世界は real なものとならず，

それを作品に構築してゆくことも不可能となったのである。小説家を志すリッキーに，生のリアリティが喪失したといふ感覚をもたせたこの情況の解明に，フォースターが小説家として取り組まずにゐられなかったのは，当然のことと考へられる。それは，そもそも小説が成り立ちうるかの問題ともなってくるはずなのである。

およそ西欧の近代小説が，それとして成り立った根底には，作者が自らが real だと考へる世界を，作品の中に構築してゆかうとする姿勢の確立があったはずである。人間の歴史と共に古くからある物語といふものが，主として聞く者を面白がらせるといふ意図で成り立ってゐるとすれば，近代小説を単なる物語から分ち，それとして自立させるものは，このリアリティに関する意識に外ならない。そしてこの意識が，構築のための形式や手法への関心を目覚めさせるのである。近代小説を形式的，手法的に特徴づけるとされる諸要因，全体の構成の見事な一貫性，明確な性格をもち，心理状態がしっかりと把握された作中人物が織りなす力学的な人間関係などは，正にこの意識に要請されて出てきたものといってよいであらう。そしてさうなると，近代小説が成り立ってゐた19世紀に於ては，現実世界そのものがこのやうな明確な秩序をもって出来上ってゐるといふ確信が，一般化してゐたのだといへさうである。それは理性（認識能力であると同時に存在の秩序でもある）への信仰や，実証主義の精神と平行するものでもある。そしてさらに根本的なところには，現実の秩序と言語の秩序との対応関係，つまり言語によってすべてが言ひ尽せることへの確信があったはずなのである。

しかし，real といふ言葉の最も中心的な意味が，「外見と本質の一致」といふことであることから，厄介な問題が出てくる。つまり何かが real であるためには，その本質把握が先立ってゐなければならないからである。「長い旅路」に於ける real は正にその意味で使はれてゐたわけであり，そこではその本質把握は，あるべき生の原型的イメージといふ形をとってゐたのであった。そしてさうなると，写実主義の意味でのリアリズムは，むしろ非常に特殊な枠組の中で成り立ってゐたのだといへさうである。それは，人間が，実体をもって存在する

「現実」を，あるがままに「客観的」に把握できるのだといふ信仰に支へられてゐた。しかしそのやうな信仰は，あらかじめもってゐた本質把握にもとづくイメージが，外の世界にうまく対応するやうに見えるといふ事情があった時代にのみ生ずるものなのである。19世紀は，総じてそのやうな時代であったといへる。認識能力は存在の秩序とぴったり対応すると信じることができた。そこには言語への信頼が確固としてあった。しかし皮肉にも，19世紀が生み出したものが，本質把握と外界との間の不一致を拡大してゆくことになるのである。それは，言葉によって，自らの構築する世界のリアリティを支へてゆかねばならない小説家にとって存亡にかかはる危機となるわけであり，「長い旅路」は正にその表現であった。ケムブリッジで通じてゐた言語は，ソーストンでは通じなくなってゐるのである。この間の事情を，もう少しイギリスに即して考へてみることにしよう。さうすれば，「ハワーズ・エンド」で問題となってくることが，もっと具体的に見えてくるはずである。

イギリス文学に於て，近代小説が完成したのは，ジェイン・オースティンの作品によってである。その構成の見事さ，人物の把握の確かさなどの背後にあって，彼女の小説のリアリティを支へてゐるものは何だったのだらうか。それは sense の働きとでもいふべきものへの，彼女の信念であるといへさうである。代表作「高慢と偏見」"Pride and Prejudice" を見てみよう。主人公の男女エリザベスとダーシーは，互に相手を誤解するところから物語は出発する。しかし二人は様々な出来事を経て，次第に相手の善さを認め合って結ばれるのである。この不均衡から均衡へ向ふ力学的構成に沿って二人を動かしてゐるものこそ，sense の働きであるといってよいであらう。

sense といふ言葉の意味は多様であり，例へば「感性」「思慮」といった，一見両立させにくい意味を含んでゐる。しかし，その多様性の背後にあるのは，「ものを識別する能力」とでもいふべき意味あひではないだらうか。つまりそれは，個々の感覚の背後にあって，それらを統合し，直観的にものを見分けてゆく，特にその善さを見分けてゆく能力なのである。さう考へれば，オースティンの小説の主人公たち

が，この sense の働きに導かれ，方向づけられて，ハッピーエンディングに達する様がよく見えてくる。そしてこのやうな小説を構成する作者オーステンも，当然この sense の働きに導かれてゐることになるわけであり，正にこの構成者と構成対象を貫く sense の働きを信ずることができてこそ，彼女は real な世界の構築への意志を確かにすることができたのだといってよいであらう。

ではこの sense への信念は，どこから生じたのであらうか。それは，彼女の日常生活，つまりイギリスのカントリー・ジェントルマンの世界での生活の中から，ごく自然に生まれたのだといってよいであらう。中世末以来，イギリスの伝統的な支配形態となったカントリー・ジェントルマンによるアリストクラシーは，内乱を経てほぼ百年のこの時期に成熟を遂げつつあったのである。しかもそれは，単なる政治支配といふ形だけではなく，その生活様式がイギリス社会の模範となるといふ形をとって達成されたのであった。そしてその生活様式は，土地所有といふことを前提として初めて可能となるものである。田舎に土地を持ち，屋敷を構へ，治安判事としてその地方の情勢に通じ，土地の管理には心をくだくが，職業に就いてある特定の利害に拘束されることはせず，人間としての善さを認め合った者どうしが社交を楽しむ生活，そのやうな生活こそジェントルマンにふさはしいものとされたのであり，「生れが良くて教養がある」といふ通念としてのジェントルマンのイメージも，その土地と結びついた生活様式から形成されてきたものであった。オーステンにとっては，そのやうなカントリー・ジェントルマンのソサエティこそ，sense が働くのにふさはしい場所だったのである。かくしてイギリスに於ては，土地所有に根ざしたカントリー・ジェントルマンの世界の中で，sense への信念によってその reality が支へられるといふ形で近代小説はその完璧な達成をみたのであった。

そのカントリー・ジェントルマンの世界が，フォースターの時代に崩壊を迎へることとなる。それは現象としては二つの形をとる。その一つは，カントリー・ジェントルマンの没落そのものより，新しい階層の成長によって生ずる事態である。イギリスでは，代々商工業によ

って富をなす者はあったが，彼らは職業につき貨幣としての富を所有してゐる限りでは，ジェントルマンの仲間入りをすることはできなかった。職を退き，田舎に土地を購入して，然るべき生活様式を身につけねばならなかったのである。アリストクラシーの側からみれば，このやうにしてうまく新興階層を同化吸収してゐたことになるのであり，それほどまでにその文化的価値的面での支配は強固であったといふことができよう。しかし，産業革命を経て19世紀も後半となると，大量に出現してきた新興階層(通念として upper middle class となる）には，もはや土地を購入してジェントルマンとなる道は閉されてしまったのである。ではミドルクラスのジェントルマン化の願望は，どのやうな形で達成されることになったであらうか。それは主として，ジェントルマンとしての教育を受け，知的専門職（プロフェッション）や官職に就くことによってであった。土地所有無しでも，教育を受けてゐるといふことで伝統的にジェントルマンと見做されてきた知的専門職は，この時期に，大幅にその範囲が拡げられることになる。また，土地所有が条件にならないだけに，ここではジェントルマンの条件としての教養が強調されることになり，古典的教養の科目つまり実用性の無い科目の修得が，知的専門職に就く条件として重視されることになるが，それに伴ひ，ジェントルマン養成の教育機関としてのパブリック・スクールは，やはりこの時期に，著しくその数を増すことになる。かうして，ジェントルマンのための教育を受け古典的教養を身につけてゐるといふことで，ミドルクラスがジェントルマンになる道が，大きく開かれたのであった。無論これも，アリストクラシーの価値面での支配の維持であることは確かである。しかしとにかく，土地と結びつかないジェントルマン，カントリー・ジェントルマンでないジェントルマンが数多く出現してきたことは，伝統的な価値意識を大きく揺さぶらずにはおかなかったと考へられる。

さらに19世紀末になると，新大陸からの安価な農産物の流入に伴って，農業が長期的不況に陥ることになる。またこの頃から，土地所有に対する攻撃が激しくなり（土地問題），それは借地権の確立に帰結する。さらにそれに，重い相続税が追ひうちをかける。かくして19世

紀末から20世紀初頭にかけて，多くの土地所有者は土地を手離し，収入源を金融資産へと転ずることになるのである。カントリー・ジェントルマンは，その多くが土地に結びついた生活様式を失ひ，カントリー・ジェトルマンでなくなるのである。かうなると，彼らは自らがジェントルマンであることを示すためには，ビジネスに就いてゐないといふことと，古典的教養を身につけてゐることを強調する以外にはない。そして，結局さうすることで彼らは，ビジネスによって成り上ったミドル・クラスも，ビジネスを退いて利子生活者となり教養を積めばジェントルマンになれるといふことを，同時に示すことになったのであった。

とにかくこのやうにしてフォースターの時代に於て，土地をそのイメージの中心にもつカントリー・ジェントルマンの世界は崩壊をみたわけであるが，そのことは当然，本当のジェントルマンとは何かといふ深刻な問ひを引き出さずにはおかなかったはずである。その問ひは，イギリスで模範となるべき生活様式はどのやうなものかといふ，イギリス社会の価値の中心にかかはる問ひでもあるからである。そして，ジェントルマン教育によって教養を積むといふことは，イギリス社会が出した一つの解答であった。しかしこの教養は，オースティンの小説世界のリアリティを支へてゐたあの sense の働きを，保証することができるであらうか。それで不十分とすれば何が必要なのだらうか。だいぶ前置きが長くなってしまったが，これらの問題をフォースターがどう把握し，どのやうな答を出したかを，「ハワーズ・エンド」にみてゆくことにしよう。

フォースターは，ゴールズワージが "The Country House" の中で，あるいはウォーが "Brideshead Revisited" の中でやったやうな，アリストクラシーを直接対象とすることはしてゐない。彼は後に，「イギリスの中心にあるものはミドル・クラスである。」と書いてゐる。しかし，ここで彼の考へてゐるミドル・クラスは，通念としてのミドル・クラスより，アッパー・クラスの方へ大きくずれてゐる。といふのは，彼は続けて「ミドル・クラスの中心にあるものは，パブリック・スクールである。」と言ってゐるからであり，そのパブリッ

ク・スクールこそ，ミドル・クラスからアッパー・クラス（ジェントルマン）への道にあるものだったからである。そしてこのことは，ジェントルマンのイメージの中心にあるものが，土地から教養へと移ったことと平行して生じた事態でもあった。しかし，土地所有とそれに基づく生活といふはっきり目に見える基準がなくなり，教養といふ本来目に見えないもので判断しなくてはならなくなれば，そこにイメージ上の混乱が生じてくることは避けられないであらう。「ハワーズ・エンド」の主人公シュレーゲル姉妹は，この微妙な場所に位置してゐたといへる。

シュレーゲル姉妹は，正に教養そのものが生きてゐるといった存在になってゐる。二人は既に両親は失ってゐるが，遺産によって生活は保証されてをり，ロンドンに住んで知的な社交生活を楽しんでゐる。父親はドイツ系であり，ドイツの伝統的な思想・芸術を高く評価する一方で，当時のドイツの物質主義的傾向には批判的でもある人物で，二人はこの父親に大きく影響されて育ったことになってゐる。フォースターはこのやうな背景によって，二人の教養に，汎ヨーロッパ的な古典的教養の性格を与へてゐる。またそれによって二人を，意図的に土地から切り離してもゐるのである。かうしてシュレーゲル姉妹は，新しいジェントルマンの生活様式を，より純粋に実現する形になってゐる。しかしそれでは，教養だけで十分といへるのであらうか。それは，あのオーステンのカントリー・ジェントルマンの世界で実現してゐた sense の働きを保証することができるであらうか。フォースターは明らかに，教養といふことの危ふさをみてゐる。このことはまず，妹のヘレンの行動によって現はされる。彼女は，その豊かな感受性の故に想像力を働かせすぎ，すぐに他人に思ひ入れをして，人を見分ける力を失ってしまふ。物語の発端となった，ウィルコクス家のポールとの恋愛事件もさうであり，またウィルコクス家への反発と，レナード・バスト氏への同情から，極端な行動へ走ることにもなる。一方姉のマーガレットは，感情に流されない醒めた目をもってゐる。しかし彼女の教養も，シュレーゲル家とは対極的な位置にあるウィルコクス家との関はり全体に於て，やはり試されてゐるのであり，その試

練がこの作品の展開の中心に置かれてゐるものなのである。二人の姉妹の対照は，オースティンの "Sense and Sensibility" を思はせる。しかし，ここはもはや，sense の働きの保障されるカントリー・ジェントルマンの世界ではない。

フォースターは，同時代の社会変化を「都市化」といふ形で常にこの小説の背景に置いてゐる。都市化は産業社会化に伴ふ現象であり，産業社会化は新しい社会階層を出現させる。まず，ビジネスによって富を成すアッパー・ミドル・クラスの階層があるが，この小説ではウィルコクス家がそれに当る。この階層の人々は，富もあり活力もあるが，急激に成り上ったために教養を欠き，即物的な考へ方に傾きやすい。ヘンリー・ウィルコクスと息子のチャールズに，その傾向はやや極端な形で出てくるが，その即物性が二代目のチャールズにより顕著なのは，注目されることである。つまりフォースターは，アッパー・ミドルのジェントルマン化の困難を，それによって暗に強調してゐるやうに思へるのである。

産業化はこの時代になると，19世紀初めの産業革命のときよりさらに高度化してきてゐたのであり，それは肉体労働者でない勤労者を大量に出現させてゐた。統計的にみても，このエドワード期には，労働者階級よりは，広い意味でのミドル・クラスの増加の方が著しいのである。ここに，レナード・バスト氏が登場する背景がある。フォースターはレナードを，ジェントルマンになる可能性をぎりぎりのところでもつ存在としてみてゐる。収入は非常に少く，会社での地位も不安定で奈落の底に落ちる可能性に常に脅かされてゐる。しかし逆にそれだけに，自分をより下の階層からはっきり区別したくなるのであり，ジェントルマンの仲間入りができるやうにと，必死になって教養を積んでゐる。しかし，悲しいことに，貧しさが彼の教養にとってもろに足枷となってしまふ。音楽会に行っても，今聞いた音楽より，無くなった傘のことが気になってしまふのである。また，ラスキンを読みつつも，自分の身辺のみじめさが頭を離れない。かうしてここではフォースターは，教養の物質的条件としての富の意味は十分認めてゐるのであり，感傷的な精神主義には陥らず，アッパー・ミドルと同様，ロ

ウアー・ミドルも醒めた目で見てゐるのである。しかしとにかく，バスト氏の登場は，この小説の射程距離を著しく大きくしたといってよいであらう。

ではその射程は，何故労働者階級にまで達してゐないのか，といふ疑問が残るであらう。しかしそれは，問題の中心に教養が置かれてゐることを考へれば，無理からぬことであるといへる。この時代には，労働者階級から教養の問題が出てきたら，それはもはや労働者階級の問題ではなく，ミドル・クラスの問題になるといってもよいのである。確かに今日では，ポップ文化が古典的教養の崩壊に最後の追ひ撃ちをかけてゐるが，それはもう階級そのものが問題にならなくなった，経済そのものの幻想性が見えてきてしまった段階でのことなのである。

とにかく，シュレーゲル姉妹，ウィルコクス一族，バスト氏のそれぞれの間のギャップを考へてみても，それは絶望的に大きい。そのギャップを埋め，調和を生み出すことができるもの，つまりはイギリス社会をあるべき方向に導くことができるものが，ここではハワーズ・エンド邸が象徴する何かとして示されてゐるのである。そして，その何かを体現した人物，それがウィルコクス夫人である。ハワーズ・エンド邸に於ける夫人の存在の意味，それは，彼女が出現しただけで，ヘレンとポールの恋愛事件をめぐるパニックが，瞬時に収束してしまったことに，象徴的に示されてゐる。夫人は，伝統のみが与へることができる本能的知恵を受け継いでゐるのだ，とフォースターは言ふ。そしてさらに彼は，不器用な表現であることを認めつつも，その知恵にアリストクラシーの名を与へてゐる。明らかに夫人は，カントリー・ジェントルマンの世界の崩壊後に，その世界の中心理念といふべき sense の働きを体現する存在として登場してゐるのである。彼女の存在を前にすると，マーガレットには，自分のロンドンの交際仲間達の間の知的会話が，妙に空虚で表面的なものに見えてきてしまふ。夫人がその知的会話に加はれないでゐることが，むしろ自分達の教養の根の浅さを意識させることになり，夫人のもつ何かの方に引きつけられることになるのである。一方夫人も，そのマーガレットに何か感応す

るものを覚えたからこそ，死に際して，自分の精神的後継者として，マーガレットにハワーズ・エンド邸を遺すことになる。そしてマーガレットは，夫人の遺志を知らされなかったにもかかはらず，夫人の役割を受け継ぐ気持を自発的に固めてゆき，ウィルコクス氏の求婚を承諾することになるのである。

ハワーズ・エンド邸は，カントリー・ジェントルマンの世界であった田園と，ミドル・クラスの住むロンドン郊外との，丁度中間に位置することになってゐる。家そのものも，煉瓦づくりで装飾の無いシンプルなところは，ミドル・クラスのそれに近いとはいへ，その周辺には十分に田園の雰囲気が残されてゐるのである。マーガレットが，ここにウィルコクス氏と共に住むことになれば，当然一つのあるべき姿が提示されるといへるのかもしれない。しかしストーリーの展開の方は，いはば必然的に，最後に主だった登場人物がハワーズ・エンド邸に集合したところで，それぞれの間のギャップが最も大きく開いてしまったといふ形になってくる。結局，その収拾のために，フォースターは，極端な形の結末を用意せざるをえなくなったといへよう。まずバスト氏は，チャールズの一撃を受け，心臓麻痺で死んでしまふ。そのチャールズは，過失致死罪で三年の刑を受けることになる。つまり，教養にあこがれるだけで，それを支へる経済的基盤をもたぬロウアー・ミドルのバスト氏と，即物的で教養を欠いたアッパー・ミドルのチャールズは，その存在を消されてしまふのである。結局，ウィルコクス氏とマーガレットとヘレンの三人が，ハワーズ・エンド邸に住むことになる。しかしウィルコクス氏は，息子チャールズの件での打撃から病人同然になってしまふ。彼の存在感の中心にあったアッパー・ミドルとしての活力は失はれ，ただマーガレットに頼るしかなくなってしまふのである。またヘレンも半病人の状態で，あの豊かな感受性の発露はなくなる。かうして，マーガレットを除いたすべての人物は，その存在そのものを消されるか，あるいはその性格的特徴を失ふかすることになってしまったわけである。しかしともかくも，ウィルコクス氏とヘレンの長年の反目は消え，二人は同居することもできるやうになったのであり，ヘレンはそれをマーガレットの知恵のおか

げであると考へる。さらにマーガレットとヘレンは共に，その知恵の働きの背後にあるものとして，ハワーズ・エンド邸の存在を意識するのである。

物語は，ウィルコクス一族の同意で，ハワーズ・エンド邸がマーガレットに遺されることが決まり，さらにマーガレットはそれを，ヘレンとバスト氏の間に出来た子供に遺すつもりであることが示唆されて，終りを迎へることになる。確かに作者は，ここで一つの答を出したのだといふことはできよう。ハワーズ・エンドといふ場所があって，そこに宿る不思議な力がマーガレットを導いてきて，さらにその影響が後代に及んでゆく。もしそのやうな力が広がり，社会を方向づけてゆくことになれば，そこに sense が働いて，生は reality を回復するやうになるかもしれない。その土地のもつ不思議な力は，いはゆる教養といふものの，特にパブリック・スクールでの教養といふものの危ふさを，しっかりと支へてくれるものとなるかもしれない。しかしフォースターは，この小説の中では，オーステンがカントリー・ジェントルマンの世界の中で sense の力を見事に機能させたやうには，その不思議な力を働かせることはできなかった。さうするためには，階級間のギャップがありすぎた。それは，結局ミドル・クラスが全部否定され，切り捨てられることになるところに現はれてゐる。フォースターが，この小説の reality に納得のゆかぬものを感じたとしても，それは無理からぬことである。そして無論彼は，その困難を知ったうへで，この小説に挑戦したに違ひない。彼が，オーステンの遺作 "Sanditon" に注目してゐるのは，彼女の小説世界の reality の崩壊をそこに見たからであらう。フォースターは，正にある一つの reality が崩壊するところに立ち合ってゐた。そして，そこから出発するためには，reality に関する別の考へ方，つまり reality を保障する実体的なものなど無いのだといふ考へ方が確立されなければならず，そこからそれに見合った手法も開拓されなければならなかったはずなのである。

Ⅲ　「インドへの道」

「ハワーズ・エンド」以後，フォースターは同時代のイギリスを対象とした作品は発表してゐない。それはこの作品に於て，自ら提示した同時代の問題に，納得のゆく答が出せなかったためと考へられるが，一方また答が出てしまってゐたら，この場合ドラマそのものが成り立たなかったかもしれないのである。「ハワーズ・エンド」は，ある崩壊感がそのままドラマ化したのだともいへよう。いづれにせよ，彼の reality 観に何らかの変更が加はることなしには，もはや作品は成り立たないといふところまで，時代そのものが来てゐたのだといへさうである。

しかし彼は，その後の二度にわたるインド体験を経て，従来の手法で，といふよりさらに物語的性格の強い手法で扱ふことのできるテーマを得たのであった。それは，インドとイギリス，そしてさらに普遍化していへば，世界と西欧といふテーマである。かくして「インドへの道」は，文明論的に拡がってゆくテーマをもって登場してくるのである。確かに「長い旅路」も「ハワーズ・エンド」も，西欧文明の危機にかかはるものであった。それがいかにイギリスの特殊事情の中に置かれてゐたとはいへ，近代文明が，それ自身が生み出した産業化の進展によって，自らを成り立たせてゐた様々な枠組を危ふくし，そこに生きる人間を生の根源から隔ててしまふことになるといふ，同時代のヨーロッパに共通する問題を，この二作は扱ってゐた。しかし，近代を通った西欧が，自らのあり方に疑問をもったところから出てくる問題と，その西欧がまだ近代を通過してゐない他の文明と接触したところから出てくる問題とは，次元が異なってゐるのであり，この両者が混同されてはならないであらう。たとへ西欧文明に幻滅したと称する西欧人が，東洋の心を求めるといふことがあるとしても，それで西欧と東洋が同じ基盤に立ったことにはならないのである。西欧が自らを，誰にでも了解可能な形で明示しつつ世界に進出してきたこと，つまり自らを普遍化したことに正面から対抗できるだけの自己明確化に，東洋の方が達するまでは対等とはならない。「インドへの道」

は，正にこのレヴェルでの問題が，展開の中心になってゐるといってよい。

とにかく西欧は，その政治・経済・社会・文化のあらゆる枠組に於て，背後に明確な原理を置きつつ自己形成をしてきた。そして，その原理を明示する諸学を発達させ，さらにそれを自明性にまでさかのぼらせるべく，哲学を展開してきた。そのやうな文明の質は，何よりも，彼らの生活様式そのものが，はっきりとした形をもってきたことに現はれてゐる。そしてそのことは，彼らが世界へ進出していった際には，そのそれぞれの地で貫かれたのである。「インドへの道」の舞台となってゐるチャンドラポアをみてみよう。そこに於て，明確な形をとってその生活様式が現はれてゐるのは，イギリス人の居住区の方である。インド人の住む側は，家も塵芥も泥も区別がつかない muddle の状態に描かれてゐる。ただ一つインドの側として明確な形を示してゐるのが，イギリス人居住区との中間にあるモスクである。であればこそこのモスクは，物語の展開の発端となる出会ひが，インドを表現しようとする意志と，インドを理解しようとする意志の出会ひであることを象徴的に示す場所となったのである。

インド人の主人公アズイズ医師は，モスクでのムーア夫人との出会ひに勇気づけられ，インドを何とかイギリス人に理解させようといふ気持になる。イギリス人の側では，インドを知らうとする意志を示すのは，このムーア夫人と，夫人と共に最近インドに来たばかりのクエステッド嬢であり，長くインドに滞在してゐる者のうちでは，大学の学長をしてゐるフィールディングのみである。他のイギリス人の長期滞在者達は，支配被支配の関係の軋轢から，深い偏見にとらはれるやうになってゐる。一方同じ軋轢から，インド人の側もそれぞれに屈折してゐる。物語の出だしでの，そのやうなインド人であるハミドゥーラとマームード・アリの対談は，西欧と接触した非西欧人の屈折の仕方の典型が現はれてゐて面白い。例へば，ハミドゥーラは自分がイギリス滞在中に受けた親切が忘れられないでゐる。しかしそれは，ハミドゥーラの方が，そこでひたすらイギリス人の規準に合はせようとしたればこそ実現したことなのである。インドに戻れば，支配者の優越

感と被支配者の劣等感は，覆ふべくもない現実として到るところに顔を出してしまふ。しかしここでは，この支配被支配のレヴェルで生ずる問題に，深く立ち入るのは避けよう。

とにかくアズィズ医師は，新来のムーア夫人とクエステッド嬢を，その近辺での唯一の観光地といふべきマラバーの洞窟へと案内してゆく。しかし，皮肉にもこのマラバーの洞窟こそ正に，無定形のインドを象徴するもの，インド的マドルの心臓部とでもいふべきものなのであった。洞窟群は，どれ一つとしてこれといった特徴はなく，互に区別することもできない。また内部は，床も天井もないやうな状態で，声もすべて吸いとられてしまひ，無気味な反響のみが残るのである。ムーア夫人は，最初の洞窟に入っただけであるが，その混沌とした空気を吸って息苦しくなり，ぐったりとしてしまふ。またクエステッド嬢は，この土地で治安判事をやってゐる俗物ロニーとの結婚に対する迷ひが頭を離れずにゐたところへ，この洞窟の異様な雰囲気が加はり，頭が混乱して，アズィズ医師に暴行されたといふ幻覚にとらはれて逃げ帰ってしまふ。

アズィズ医師は，クエステッド嬢に告発され，裁判となる。この裁判をめぐって，またイギリス側インド側それぞれの偏見と屈折が表に出てくる。それに細かくは立ち入らず，ここでは主としてフィールディングとアズィズの関係がどうなってゆくかを見てみるとしよう。フィールディングは確かにインドに理解を示さうとしてゐる。しかし彼はその生き方に於て，西欧的原則を全く崩さうとはしてゐない，といふよりむしろそれを徹底化したところに立ってゐるのである。従って彼は，アズィズをあくまで個人としてみて信用して，友人となってゐるわけである。裁判に於ても，彼のアズィズを信ずる気持は少しも変らず，アズィズの無罪獲得のために力を尽さうとするが，それもあくまで公平な裁判の原則が貫かれる中でさうしたいのである。彼はイギリス人の反感を一身に受けるが，一方インド側が事件を必要以上に大きくするのも防がうとする。西欧で教育を受けたはずの法曹家ハミドゥーラすらも，法律問題と民族感情を混同してゐるのに，彼は失望する。そして事件はたちまち民族問題へと発展し，裁判とは直接関係の

無い人々も動員されて，双方への圧力となってゆくのである。

裁判の中で，弁護側が，アズィズ医師の無罪を証明できるはずのムーア夫人が，検察側によって国内に出されてしまったと申し立てるや，ムーア夫人の出現を祈ることはがどこからともなくわきおこり，街中にまで広がってゆく。しかしその時，彼女はすでにこの世の人ではなかったのである。フィールディングとは対照的に，ムーア夫人はインド的混沌の中に深く入り込んでしまったのだといへよう。洞窟の空気を吸って以来，彼女は全存在が虚無に浸されてしまふ。アズィズ医師は当然無実とわかってをり，それを語ってクエステッド嬢を混乱させはするが，自らすすんでアズィズ医師を助けようとはしない。そして息子ロニーに言はれるままに，インドを去ってしまふのである。しかし彼女は，遂に地中海まで達することなく，インド洋に没する。彼女の死が伝はると，チャンドラポアのインド人の間で伝説が生まれ，彼女の神格化が始まってそれが各地に広がってゆく。彼女の墓が複数出来てくることが，その迷信の深さをよく示すこととなってゐる。

クエステッド嬢が自分の勘違ひを認めたことにより，アズィズ医師は当然の無罪放免を得，インド側は勝利に酔ひしれる。しかしアズィズ医師は，誤解されて裁判にかけられた屈辱よりさらに，インドを表現しようとして失敗したことに深く傷つく。以後の彼のフィールディングに対するいら立ちは，半ば自分に対するいら立ちでもある。そしてそれだけに，それから逃れる術もなく，彼はインド的混沌の方へ退行してゆく。それはまず，フィールディングを誤解することに現はれてくるが，その誤解は彼とクエステッド嬢との関係に集中する。フィールディングは裁判終了後，危険な状態に置かれたクエステッド嬢を大学構内に匿ふが，そのとき彼女の誠実な人柄を知る。彼女が謙虚に自らの愚を悔ひ，アズィズ医師に対しても詫び状を書いたことから，彼は，アズィズに賠償金の要求をしないことを約束させる。これらの行動は，裁判上のことは裁判の原則に従って処理されるべきであり，個人間のことは個人的信頼関係に基づくべきであるといふ，法の支配，個人主義等に対する彼の明確な意識から出て来てゐる。しかしア

ズィズは，ハミドゥーラから聞いた根拠の無い噂を信じて，すべてを疑ひの心で見てしまふ。

アズィズの疑ひは，クエステッド嬢とフィールディングがあひ次いで帰国し，やがてフィールディングが結婚したことが伝はってくるところで頂点に達する。彼はフィールディングの手紙を，読まうとすらしなくなる。金銭に無頓着なはずの彼が，自分に支払はれなかった賠償金が，結局フィールディングのものになってしまったのだとまで思ってしまふ。そしてそれを，イギリスによってインドから不当に持ち去られた富のイメージに重ね合はせる。二年後にフィールディングが会ひに来たとき，彼は自分からは出てゆかうとはしなかった。彼はそのときチャンドラポアを離れて，ヒンズーの藩王の侍医となってゐたのであり，二人の出会ひの日は，ヒンズー教の神の降誕の儀式のある日であった。彼はこのときには，混沌とした迷信的信仰にとらはれたヒンズー教徒たちに，深い共感を示すところにまで来てゐた。表現を断念させられた彼は，インド的混沌に身をまかせてしまったのである。しかし，フィールディングとの再会で誤解は解け，アズィズ医師の心はなごむ。特に，フィールディングがムーア夫人の娘と結婚してゐて，しかも夫人のもうひとりの息子であるラルフ青年を連れてきたことは，彼の心に，ムーア夫人とのモスクでの出会ひのあの感動をよみがへらせる。一抹の希望を見い出した彼は，フィールディングとの議論を楽しむが，そこで彼は，インドが一国民になったとき初めて自分たちは友人となれるのだと主張する。そしてそれは，インドが普遍的な形に自らを表現しえたときのことだと，言ひかえてもよいのである。

この間に，フィールディングも，自分の立ってゐる場所をはっきり確認してゐた。それは彼が英国への帰路，地中海に入ったときのことであった。地中海の諸都市の景観が，インドとの対照で示すもの，それは形式の美，理性によって支へられた調和の美であった。彼は，形式の無いところに美は無いと確信する。この地中海的明晰，地中海的調和，これこそ自分達西欧の人間が目標として文明形成を行なってきたものであり，この道を引き返すことはできない。もしインド人と個

人として友人となるとしたら，インド人の側こそが自らの内なる混沌を克服し，この明晰さに到達してゐなければならない。さうでなければ個人的関係にも民族的偏見が必ずもち込まれてしまふであらう。インド人の側がこのレヴェルに来てゐないのなら，少くとも現在のインドに国家としての形を与へてゐるインド帝国を，いちがひに否定するわけにはゆかない。フィールディングの考へは，そこまで来てゐた。

この，フィールディングの到達したところは，そのまま，二度のインド経験を経たフォースターのたどり着いた場所だったといってよいであらう。彼は確かに同時代のイギリス社会には批判的であった。そして問題を，産業化によって生じた新しい事態に，従来の社会的文化的枠組が対応しきれなくなったといふところに見てゐた。イギリスの場合それは，伝統的なジェントルマンの理念に支へられた価値の枠組の危機であることも，彼は意識してゐた。そしてこの点では，中産階級のジェントルマン化の機関であるパブリック・スクールのあり方を，極めて厳しい眼で見てゐた。そこでは，にはかジェントルマンが効率よく生産されるだけで，本当の教養は身につかないと考へたのである。さらに彼は，もしたとへシュレーゲル姉妹のやうに，教養が身につき，十分な資産をもってゐたとしても，まだ同時代の問題を支へきれないといふことまで気づいてゐた。であればこそ，「ハワーズ・エンド」でそれなりの答を出さうとしたのであった。さらに，初期の短編や「長い旅路」に於ては，近代を超えるあるべき生の原型を求めて，ソクラテス以前のギリシャ，つまり根源的自然のイメージの生きてゐた時代への傾斜といふこともあったのである。

しかし，たとへ西欧に生きる彼がこの段階まで来てゐたとしても，そしてそれが西欧文明そのものの直面してゐた問題とつながってゐたとしても，西欧対非西欧，イギリス対インドといふ位相に移れば，考へ方の次元そのものが変ってしまふ。フォースターは，この位相に於ては，ギリシャを受け継いだ形での西欧文明の形成原理をはっきりと肯定し，他の文明が明晰を求める原理的意識に目覚め，自らに普遍的な表現形式を与へてゆけるやうになることを求めてゐるのである。かくして，問題はまた私達に投げ返されてくるのである。